「シマグチとぅシマウタ～奄美のことばと暮らしと情熱と～」

司会：坂本憲（国際日本研究センター副センター長）

講演者；町健次郎（まちけんじろう）民俗学者。与論島出身。奄美大島、瀬戸内町立図書館・郷土館学芸員。琉球大学大学院修了。博士（学術）。

14:00～　共同体としてのシマ～その時間と空間～

奄美では「シマ」は “island”ではなく共同体、コミュニティという意味で頻繁に使われる。人々が自分の帰属する集団として、具体的な場所として、そしてそこを遠く離れて故郷を思うとき、「シマ」は人々を結びつける。この世界観を理解するためには、奄美に独特の時間の流れと、空間の感覚を知る必要がある。

生活を支え、伝統を紡ぎ、人々の拠り所であり続ける「シマ」を、時間をかけてめぐったフィールドワークの積み重ねから見えてきたもので、解き明かすことを試みる。

講演者；前田達朗（まえだたつろう）国際日本研究センター教員。専門は社会言語学、特に日本の中の少数者の言語問題。

15:15～　奄美語=島口　～社会言語学のできること～

「奄美語」はユネスコの Atlas of the World's Languages in Danger の中で日本域内の 8 つの「危機言語」の中の一つとされている。日本では「方言」とされる奄美の言葉が、外側から見れば一つの独立した言語と見なされるということであった。しかしこのことは地元ではある種の戸惑いを持って迎えられた。奄美に独自の複雑な歴史・社会的背景があるからである。それらが、このことばを継承の危機に陥らせている。社会言語学はこの「危機」に何ができるのか？2013 年 3 月に完成した映像教材「瀬戸内のシマグチ」はその問いに対するひとつの試みである。

16:45～　シマウタライブ

シマウタもしくは島唄は、人々に長い間受け継がれてきた奄美の宝である。日々の暮らしを、悲しい運命を、そして人生の教えを奄美の人々は歌い継ぐことで、子や孫に伝えてきた。いまも若い後継者が続々と生まれ、シマウタがある限り、シマグチもつながるであろう。今回は瀬戸内町出身のふたりの若手唄者（うたしゃ）を迎える。歌詞のシマグチはわからなくとも、魂を揺さぶられる瞬間が、きっとあるだろう。

唄者；徳原大和（とくはらやまと）1988年生まれ。瀬戸内町諸鈍出身。幼少の頃から島の老人に島唄を習い、島唄に囲まれて育つ。2004年の奄美民謡コンクール敢闘賞をはじめ、各種の民謡大会で数々の賞を受賞。アルバム「初期の徳原大和奄美島唄傑作選

唄者；里　朋樹（さととも き）1990年生まれ。瀬戸内町古仁屋出身。6歳で島唄を、7歳で三味線をはじめる。2002年・2003年奄美民謡大賞少年の部最優秀賞。2002年民謡民舞少年少女全国大会準優勝。アルバム「大樹の唄」（2003）